

明治150年をどう迎えるか

あと3日で今年も暮れる。明け
て始まる平成30年は明治150年
でもある。新天皇即位の後、慶応
4年9月8日に元号が明治と改め
られて150年がたつ。徳川幕府
を倒し新政府を樹立、「ご一新」
と呼ばれる天皇親政の中央集権国
家への転換が明治維新であり、こ
の維新こそが近現代日本の生成発
展の「基点」である。

「旧来の陋習」を破った維新

明治維新とは、薩長を中心とす
る雄藩が古代に淵源をもつ天皇を
権威の象徴としてアンシャンレジ
ーム(旧体制)に挑戦、新国家建
設に向けてエネルギーのすべてを
噴出し、これに成功した革命であ
った。その遂行により初めて明治
維新が成ったといっている政治的
達成が、廃藩置県であった。

廃藩置県とは徳川幕府を中央政
府とし、多分に自立的な二百数十
の諸藩を地方政府として全国に配
し形作られていた地方分権的な幕
藩体制から、中央集権的国家体制
へのシステム転換であった。徳川
幕府は石高を減封の上で駿府に移
封、各藩の藩主と武士団も身分と

家禄を手放さざるを得なかった。

旧体制の既得権益のことごとく
を奪い、その上に主権国家を建国
していくという難業に挑んだ時代
が明治であった。明治維新の基本
精神を明示したものが五箇条の御
誓文である。明治維新の開明性を
これほど端的に示した文書も他に
あるまい。

その第4箇条が「旧来ノ陋習ヲ
破リ天地ノ公道ニ基クヘシ」、第
5箇条が「智識ヲ世界ニ求メ大ニ
皇基ヲ振起スヘシ」である。学制
発布、国民皆兵、地租改正、殖産
興業・富国強兵、帝国憲法発布、
帝国議会開設、日清戦争勝利、日
露戦争勝利、不平等条約改正―な
どこれらすべてが明治という一時
代をもって実現された。「旧来ノ
陋習ヲ破リ」「智識ヲ世界ニ求
メ」たことの帰結であろう。
それにしても、なぜ明治という
時代がこれほどの大願を成就した
のであろうか。明治維新が成った

正論



拓殖大学学事顧問
渡辺 利夫

頃の世界は帝国主義時代の真った
だ中にあつた。西欧列強の「西力
東漸」により、インドの植民地
化、中国沿海部諸都市の租界地
化、ほとんどの東南アジア諸国の
植民地化がなされ、弱者には安住
の地が与えられることのない弱肉
強食の時代であった。

指導者が抱いた亡国の危機意識

この時代にあつてなぜ日本のみ
が独立を保ち得たのであろうか。
一つは、往時の指導者が正確な
「自画像」を描いていたがゆえで

舵を切った。明治の指導者のセル
フイメージには狂いがなかった。
寸分の狂いが亡国につながるとい
う危機意識のゆえなのであろう。

二つには、明治の指導者をかく
あらしめた条件を日本の旧社会が
培ってきたことが注目される。ア
ンシャンレジームがアンシャン
(旧)であるがゆえに劣化・衰退し
ていくときに、これを破壊し新た
な正統的レジームを創る「代替者」
を旧社会が用意していたのであ
る。幕末期のように幕府の統治力
に衰えがみえたときには、薩長な
ど地方の雄藩が結集すれば、幕府
を倒し新国家を樹立し得るほどの
力量を持った人材が諸藩の内部に
蓄えられていた。明治維新とは、
つまりはそういうことである。

文明開化もまた彼らが自国の自
画像を正確に描き、その必要性を
鋭く悟ったがゆえなのであろう。

絶望を希望へ転じる「基点」に

古代的で専制的な王朝の伝統を
引き継いで、皇帝や国王という絶
対的権力者をいただき「権力資
源」のすべてを中央に集中してき
た清国や朝鮮には、次代を担う代

替者が育つ空間はなかった。

明治維新を経て近代化へと向か
う日本は、列強に自らの顔を映し
出し正確なセルフイメージをもち
文明開化を必須の条件と認じる指
導者に恵まれた。さらに旧体制そ
れ自体がそういう指導者を輩出す
るための土壌を豊かに形成してき
た。この2つが日本を非西欧世界
におけるほとんど唯一の近代国家
たらしめた要因である。

明治150年は、このことを現
代の日本人に再確認させる年とな
ってほしい。第二次大戦後70年余
がたち、極東アジア地政学が極度
の緊張下にあるのにもかかわらず
ず、憲法改正論議さえ盛りあがる
気配がない。少子高齢化によって
社会経済全体の衰弱化が加速する
一方、歴史に例をみないこの困難
を前に果敢とたたずむのみ。現代
を生きる日本人としての正確な自
画像を指導者も国民もまた手にし
ていない。次代を担う代替者はど
こにいるのか、いまだ不分明であ
る。明治150年を日本の絶望を
希望へと転じる新しい歴史の「基
点」としようではないか。
(わたなべ としお)